橋梁巡れし 4

Aさん、Bさん、Cさん

10……一ツ橋

A 「今日は一ツ橋から雉子橋を通つて、飯田町驛下の新三崎橋まで行きませう。ではお初め下さい。」

C 「別に大して云ふこともないやうですね。」

B 「いやあるよ。一體この橋は何と調子を合せたんだらう。」

C 「このお堀や平川門に合はせたつもりなんでせう。」

C 「ところで、そのお堀の石垣や平川門とも調和はされてゐないね。」

C 「反對側の如水會館とは又ちよん髷に洋服見たいな差だし。」

B 「如水會館とはふき出したい位不調だね。そして又今度修繕した如水會館は誂樣の設計か知らぬが思ひ切つたもんぢやないか。」

A 「いや不味のは賛成だが、ぞうも脇道にそれそうだ。今日は橋だけだよ。」

B 「おつと承知之助。この橋は拙いものではないがしかし落付きがないね。」

C 「うつぺらなやうですね。」

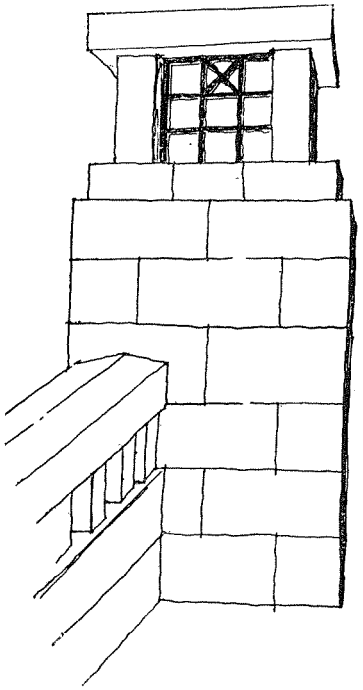
A 「薄つぺらとまでは云へないが、あんまり角張りすぎてゐるんでせう。またセセッション式が日本人のあたまに後生大事にしまつてある譯だね。堀の石垣のやうな圓みがほしい。あのぞつしりした、そしてあの内にある暖か味だね。しかしあの平川門の修繕は念入に不味いもんだね。」

B 「おつと此度は君が脱線したぞ。」

A 「いやこいつはうかつ千萬。」

三人笑ふ。

C 「大きな親柱を欄干との間に付けたのはどうですかね。」



一ツ橋

A 「うん、そのために落ちつきを失つたもんだね。」

B 「こんなに幅の廣い場合には一層惡い。」

C 「石の欄干はいゝぢやありませんか。」

B 「部分的に見ていゝですね。」

A 「しかし、此の場合では例の親柱と共にいい結果にはならないと思ふね。親柱を兩端を持つて來てこの石の欄干はいゝが――。」

C 「こゝでは反つて落付かなくなつたんだね。」

11……雉子橋

A 「次は雉子橋。」

C 「これは一つ橋より大分日本趣味が入つてますね。」

B 「思ひつきだが、この親柱はでかいね。そ

して親柱ミ云つていゝのかな。」

C 「もう一つの建築物ですね。」

A 「ミころで此でか物先生何に見えるかい」

B 「明治神宮の燈爐かな。」

A 「明治神宮の燈爐にこんなものがあるかね。」

B 「いやあるかないか知らんがね、そんな氣がするんさ。」

C 「成程、ミにかくお宮さんの感ですね。」

A 「僕にはごうも石廊のやうに見えてならないがね。」

B、C「成程、それがいゝね。」

A 「ミころで石廊ミ擬寶珠ミはごう思ひます。」

C 「しつくり調和しませんね。」

B 「何處か落ちつかないね。」

A 「僕はこう思ひますね、この石廊に比べて擬寶珠君が少し勝ち過ぎてる爲だミ思ふがね。」

B 「うんそうだね、擬寶珠がもつミ小さくあるべきだね。」

C 「擬寶珠があまり大いから、石廊もだんだん大きくしたのでせう。」

A 「そうですそうです。」

B 「これぢや龍虎相爭ふミいふ體だ。」

C 「欄干は」

A 「これで結構でせう。」

B 「刀の鐔の應用はごうです。」

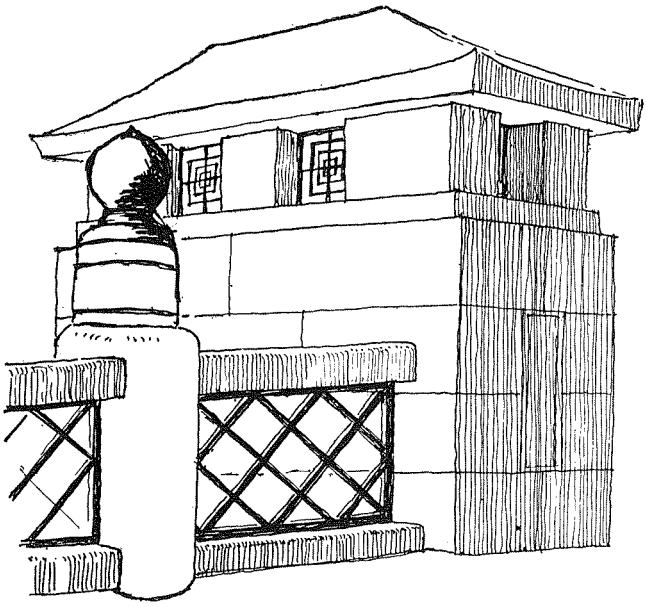
A 「これは愚の骨頂でせう。しかし鐔の模樣を利用するのは惡いミ云ふんぢやないんですよ、それはすこぶる良い事で贊成ですが、しかしわざわざ刀身の穴までつけたり、しなくてもいゝだらう。こんな大きな鐔は何處の世界にもないからね。」

C 「そりやあかまわんぢやないですかね。」

A 「しかし滑稽ですよ。ごうも不合理ぢやありませんか。」

C 「刀の鐔その物を裝飾に利用するんだからいゝぢやないんですか。」

B 「其儘使ふのはいゝが、ごうかな。」



雄子橋

A 「鐔に目を付けてくれたのは嬉しいがこれは不味いですね。それから電燈はごうでせう。」

C 「暗いでせう。」

B 「この頃の新しい橋の多くは暗いね。」

A 「神田橋でも一つ橋でも江戸川橋でも皆暗い、あまり親柱に力を入れすぎるからだね。」

C 「橋の名なぞ夜分には見えませんね。」

B 「見えるもんですか、道路より、餘ッ程暗いでせう。」

A 「今に橋の上ばかり追剝强盜が出るようになるねハゝゝ」三人大笑。

A 「もう時間も大分たちましたから、あミは此の次の日にして今日はこれで開散致しませう。